

Title	原爆文学「批評」という集合的記憶
Author(s)	横山, 寿世理
Citation	聖学院大学論叢, 第 25 卷(第 2 号), 2013. 3 : 119-128
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4407
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

原爆文学「批評」という集合的記憶

横山 寿世理

抄 録

本稿の目的は、いくつもの原爆文学「批評」を、モーリス・アルヴァックスが社会学において提唱した集合的記憶として整理することにある。本稿では、3誌に掲載された75本の原爆文学に関する批評は、アルヴァックスが集合的記憶として説明した時間的枠と空間的枠へと分類される。

その上で、多くの批評は、原爆文学は記録なのか文学なのかという時間的枠と、原爆文学には原爆に関する個人的な体験が描かれているのか、それとも一般化されているのかという空間的枠とを伴った集合的記憶であることを実証できるだろう。また、これらの批評が、第二次世界大戦を体験した世代と戦後世代とのあいだで、ヒロシマとナガサキの記憶を継承させるということを明らかにする。

キーワード； アルヴァックス、集合的記憶、原爆文学批評、時間的枠、空間的枠

1. はじめに

本稿の目的は、原爆文学「批評」をアルヴァックスの集合的記憶⁽¹⁾として捉えるための前段階として、その批評を整理することにある。あるいは、原爆文学批評⁽²⁾自体の分類が集合的記憶として成立するかどうかを模索する試みとも言える。

そもそも原爆文学とは原爆や核に関する文学である。長岡弘芳は、原爆文学を「原爆投下もたらした、あの目に見える限りにとどまらず、内部からも人間存在を蝕み脅かしてやまぬ、その事実を題材とする文学」と定義する⁽³⁾。ある原爆文学批評によれば、「原爆文学のはじまりは、当然の如く、原民喜、大田洋子らによって、現場の再現から始まった」⁽⁴⁾のであるが、原爆文学というジャンルが誕生したのは『夏の花』『黒い雨』が国語教科書に採用され⁽⁵⁾、長岡弘芳の『原爆文学史』が登場した1960年代後半から70年代前半のことだと言われている。

そして、この原爆文学批評が集合的記憶として原爆文学を再構成しうるのかを模索することが、本稿のさらに先にある研究の最終目標になる。その手がかりは、アルヴァックスが集合的記憶の存

続を説明するために利用した時間的枠と空間的枠とにある。そのため、本稿では、原爆文学批評を集合的記憶という再構成作用として考察する際に、集合的記憶論の基盤となる時間的枠と空間的枠がその一助となるという仮説に基づき、原爆文学批評を整理することにしたい。

2. 分析対象

原爆文学批評界にある種々の研究誌・同人誌の中から下記の3誌を取り上げる。

A『国文学——解釈と鑑賞』は、1985年に原爆文学特集を組み、ここに掲載された批評・論考全30本中、本稿で分析対象とするのは22本とする（以下、『国文学』と略記）。『国文学』は1936年に至文堂から創刊された月刊誌であり、創刊当時の主な執筆者は国文学者であった⁶⁾。本稿で取り上げる1985年の特集号での主な執筆者は大学に所属する研究者と評論家である。

B『安芸文学』は広島市周辺の安芸文学同人会により1958年（昭和33年）に創刊された同人誌（年1～2回発行）であり、原爆文学に限らず、文学作品を中心として文学作品批評や体験記・エッセイも掲載している。本稿で分析の対象とするのは、1962年第11号～2002年第70号に収録されている19本の批評である。主な執筆者は作家・評論家である。

C『原爆文学研究』は九州大学に事務局をおく原爆文学研究会の発足に合わせて2002年に創刊された年報である。分析対象とするのは、同誌2002年創刊号～2008年第7号の「批評」に分類されている全51本中34本とした（原爆児童文学や特集を除いた）。主な執筆者は大学に所属する（非常勤も含む）研究者である。

3. 時間的枠——原爆文学批評界——

集合的記憶が時間的枠の共有を特徴とすることはすでに確認した。そこで、ここでは、原爆文学批評界で共有された時間的枠（つまり、『国文学』『安芸文学』『原爆文学研究』に共通する時間的枠）を示すと思われる批評を取り上げたい。つまり、原爆文学批評界に共有されているであろう順序を時間的枠として捉えることにする。

その枠とは、原爆文学批評界における〈原爆文学の歴史〉に関する時間的枠であり、原民喜『夏の花』（1949年）や『屍の街』（1948年）『夕風の街と人』（1955年）の大田洋子のように実際に被爆を経験した作家と非被爆作家の井伏鱒二『黒い雨』（1966年）の関連を重視することになる。

その後「黒い雨」の登場によって状況はさらに展開されます。政治的な対立を越えたところで、「庶民」の体験を「平常心」をもって描きえたという江藤淳に代表される評価がこの作品に与えられ、そのことによって、「平常心」という言葉とは対局にあるものとして、「夏の花」や大

田洋子の作品が排除されていきます⁽⁷⁾。

「夏の花」は20年前にこそ書かれるべき作品であったし、「黒い雨」はあれから20年後に書かれるべくして書かれた作品であった⁽⁸⁾。

このように、この時間的枠は、原民喜の『夏の花』・大田洋子の『屍の街』から井伏鱒二の『黒い雨』に至る過程を、原爆文学がより高次の文学へと発展する過程と捉えていることがわかる。あるいは、『黒い雨』を『夏の花』と比較参照した〈原爆文学の歴史〉⁽⁹⁾ 理解とも言える。この時間的枠は、それぞれの原爆文学批評界に共通する作品の順番付けであり、時系列に基づく枠よりも『夏の花』と『黒い雨』の登場順やその間隔が重視されている。

というのも、原爆文学批評界において繰り返し議論されている論点として、原爆文学は「記録」なのか、「文学」「小説」なのかというものがある。楠田は、被爆体験をもたない作家が原爆文学を描くにはルポルタージュしかなかったと述べている⁽¹⁰⁾。このような二項対立は、『原爆文学研究』に留まることなく各雑誌において確認できる。

〈原爆文学〉という概念については、フィクションとノンフィクションの2つのジャンルが共存するという矛盾を孕んでもいる。ただこの概念を可能にするならば、まずは表現者を先に立てることが必要だと考える⁽¹¹⁾。

問題は、被爆の惨禍をいかに採録しても、人間が描けていなければ、〈記録〉にはなっても〈小説〉にはならない⁽¹²⁾。

「黒い雨」は「……」被爆時のできごとを入念にたどるが、そして、平静な、ユーモアを含んだ観察の目が感動を誘うけれども、その感動は強烈な事実性がよびおこすものであり、記録や体験記に散見する細部を取り入れた部分「……」が逆に作為をあらわにして、「……」日記として叙述される部分が克明であればあるだけ、記録を小説めかきに置換し、無傷な傍観者の目にすりかえられる「夏の花」(原民喜)は「黒い雨」が中途からのめりこんだ記録性をもたず、その意味でささやかな見聞、体験記の域を出ない⁽¹³⁾。

つまり、記録か小説かという論点は、作中に被爆者の日記を配置した『黒い雨』の登場によって、被爆作家の記録だけではなく、非被爆作家が原爆について文学を創作しうるのは、被爆体験を一般化できるのかということが強く意識されたため生じたと考えられる。単なる記録文学ではなく、小説として広く読者を得ることが求められたからこそ、『黒い雨』との連続を〈原爆文学の歴史〉とい

う時間的枠として共有する必要があったのではないだろうか。

すなわち、原爆文学批評界において、非被爆者である「次世代」⁽¹⁴⁾ 作家に位置する井伏鱒二の『黒い雨』を境に、原爆文学から核文学へと拡がりを見せる〈原爆文学の歴史〉を時間的枠として批評が展開してきたと考えられる。つまり、それは、より高次の文学へと原爆文学を発展させて文学として一般化させようという方向性である。この方向性を示す時間的枠は、続く空間的枠によって補強されることになる。

4. 空間的枠——体験主義をめぐる——

続いて、時間的枠によって明らかになった原爆文学批評界における「記録／小説」という二項対立を、「体験主義／被爆体験の一般化」という二項対立に置き換えて、これに関する表記を各批評から取り出したい。体験主義⁽¹⁵⁾とは、被爆体験がなければ原爆の悲惨さはわからないという立場である。また、体験主義に否定的もしくは懐疑的ならば、被爆体験を一般化すべきなのか、原爆を文学で表象することはできるのかという論点も次第に明らかになる。

冒頭で述べたアルヴァックスの集合的記憶論にしたがうと、空間的枠は場所のことだと考えられるわけだが、ここでは文学批評という表象を生み出す作業が、時間を共有する集団における空間化の作業だと考えたい⁽¹⁶⁾。

そこで、ここでは、言語化によって原爆文学批評が表す空間的枠に注目して、原爆文学の言語空間での表象内容を取り出すことにする。

A 『国文学』（「特集＝原爆文学」1985年）

対象の3誌の中で最も体験主義を評価する批評が多い。被爆者の責務を評価することや、一般化できない個別の被爆体験を取り上げることで、体験主義の立場に立つ。

「夏の花」のなかにも、「このことを書きのこさねばならない」という文章で出てくるが、いずれも時代の証言者としての自覚である。[……]時代の証言者としての自覚が必然的に生み出す記録精神がある⁽¹⁷⁾。

林京子の小説は[……]原爆をあるいは被爆体験を一般化して描いていない。あくまでも被爆者の日常を今と過去と、歴史を遡行させつつそれらを絶えず交錯させながら、被爆者一人一人の生をかけた作品の創出なのである。人びとの胸を打つのは、基本的には、こうした作家の創作態度にあると思う⁽¹⁸⁾。

「私はこの記録を書く適任者である」という永井の自負は、決して独りよがりではなかった⁽¹⁹⁾。

小田実は、〈「ヒロシマ」のことは私にはとうていかけないと思っていた。それはやはり、「被爆者」が書くべきことだし、彼らだけが究極には書き得ることだとも思っていた〉と述べているから、被爆者でない小田実の被爆者にたいする謙虚な姿勢が理由のひとつだと考えるべきであろう⁽²⁰⁾。

B 『安芸文学』

ここには、『国文学』の特集よりも以前に、戦後20年が経たないうちから、体験主義への懐疑や批判を表明する批評が多く、その中には体験主義を一般化・普遍化することを目指す批評があることがわかる。つまり、体験主義からは距離をとって一般化することが、『安芸文学』における被爆体験の継承方法だと考えられる。「原爆の理念化・思想化」を目指すスタンスは、そのことを裏付けるだろう。

原爆の経験は過去十数年前におこった一回きりのものであり、しかも人類始まって以来の出来事ですから、それは原因や結果から導き出されるものではなく、過去、現在、未来の同時性のなかに突然あらわれた現実として[……]目に見えるものに全く新しい名前をつける経験であったわけです。その意味では、被爆者以外の者の追体験を拒否する原体験です。[……] / では、われわれの経験と広島、長崎の被爆者や、福竜丸の船員たちの体験と結びつける直接の糸口はないものなののでしょうか。[……] / かれらの原体験を一般化し、普遍性を得る根拠をもとめなければならないというのが、原爆を理念化する重要な目的でもあるわけなのです⁽²¹⁾。

原爆作品の多くは、この“人間の経験をはるかに超えた事態”に甘えすぎてはいなかったろうか。“これから書こうとする物語の背景は、みなさん先刻ご承知の、その原爆であります”という前口上の安易さに支配されていたのではないか。読者に前以て事態の概要を知る義務を押しつけるという、私小説構成法や創作態度は、真に原爆を書くという態度からかけ離れたものであったことを反省する必要がある⁽²²⁾。

これまで知られている“原爆文学”や“被爆体験記”なるものの閉鎖性から『黒い雨』が免れていると思われるからである。典型的には、体験記なるものが、その記録者個々の体験を、他者の介入を許さない主観性や特異さとともに傲岸さをもって記述しがちであるからである。個々の狭い視野からの主張や偏見が共有すべき体験の海を埋め立ててしまい、広漠たるものを露呈するに過ぎぬとき、『黒い雨』は、他人の体験を巧妙に構成して、個々が見捨てた体験を拾

いあげ、昭和20年8月6日という巨大な歴史空間を可視的なものにしたと思えるからである。

[……『黒い雨』は]「被爆者の内部に読者を立たせることを要求しない。[……]『黒い雨』の
評価を支えるものは、二十数年をへてようやく風化した、被爆国の非被爆者の被爆感覚なので
はあるまいか⁽²³⁾。

C 『原爆文学研究』

『原爆文学研究』は、『安芸文学』と同じく、これまで議論の俎上に載せられなかった被爆体験共有の困難を鑑みながら、体験主義を批判的に描く批評が展開されているという特徴を示している。また、少なからず体験主義批判から被爆体験の一般化による体験継承という視点が、『安芸文学』における「原爆の思想化」と同様に示唆されている。つまり、『安芸文学』ならびに『原爆文学研究』は、被爆体験者の個別性、すなわち体験主義を強調するのではなく、被爆体験の一般化や普遍化による被爆体験の表象可能性を模索していると考えられる。

[井伏鱒二『黒い雨』批判をした豊田清史を引き合いに出して検討して、]「歴史」とは[……]
今現在の日常を生きる中で必要や欲望に応じて要請され続けていく、過去の表象であるという
認識が共有されつつあります。「原爆」の記憶、「原爆」の表象にしても、そのつどそのつど
の時点に現在の問題と関わりをもつからこそ、繰り返し語られてきたのではないのでしょうか。
「体験の絶対化」「体験の継承」といったこともこうした問題構成のもとに再構成される必要が
あるのではないのでしょうか⁽²⁴⁾。

原爆に関する作品を書く資格は被爆体験者だけにある、という悲痛な悲痛な責任感に縛られた
結果、「不謹慎」という一言によって特権的な立場に自らを囲い込んでしまった経緯がこの反駁
文からはよみとれるのだ⁽²⁵⁾。

この詩[峠三吉の詩]は被害者の声が一般化されるプロセス自体を描いているのであり、この
序詩の極めて抽象的な詩句から読み取るべきなのは、峠が結びつけようとしている「ちちをか
えせ」と「へいわをかえせ」との間の断絶であろう。そして、この序詩が、個別性と一般性と
の間で揺れ動くようなものである限り、それは均質な表象体系への抵抗として評価できると
思われる⁽²⁶⁾。

彼[川上宗薫]の場合は、原爆の記憶を編成する要素としてきた存在、「遠い」ところから眺める存在、に仕立てる傾向が強かった。それは、原爆そのものを体験していない自分が非当事者という立場から被爆を語る事への躊躇いだったのかもしれない。[……]彼は原爆を特化して

語ることに強い抵抗感をもっている⁽²⁷⁾。

「なぜ、他にもない原爆被災という過去との連関（だけ）が重要視されるのか」という前提をめぐると考察、これが欠けているのである。とくに、自分自身はそれを直接経験していないと考える世代にとって、自身の当事者性を見いだすことは自明のことでないはずだ⁽²⁸⁾。

原爆の問題を広く社会に訴えかけたり後世に伝えたりすると同時に、文学的にも優れたものであること（その判断自体も問題を孕んでいるが）を求められる原爆文学は、当然のことながら困難な営みとならざるを得ない。言語を絶する経験を言語化することの不可能性と向き合いつつ、林〔京子〕はどう「文学」の問題と関わっていったのか⁽²⁹⁾。

つまり、原爆文学批評界は2つの空間的枠を形成すると予想できる。それは全国誌『国文学』の体験主義であり、それに対峙する地方誌『安芸文学』『原爆文学研究』における被爆体験の一般化である。その上で、これらの空間的枠は、時間的枠を補強することになる。時間的枠においても、『黒い雨』という時間的な区切りは、記録／小説という境界を示す枠であると同時に、体験主義／被爆体験の一般化の境界を示す枠である。すなわち、時系列を反映したものではない。このような時間的枠の詳細な変化を、空間的枠が表していると言えるだろう。

体験主義をとった1985年『国文学』よりも、体験主義を批判して原爆の一般化を主張した1962年以降の『安芸文学』の方が時系列的には先行している。つまり、『国文学』の体験主義よりも『安芸文学』における被爆体験の一般化の方が早くから登場していた。その後、批評家の移動はないまま、『安芸文学』で原爆文学批評が行われない時期（1980年代後半～1990年代）があり、これに続いて、『原爆文学研究』が創刊された（2002年）。あえて時系列に並べると、『安芸文学』の被爆体験の一般化から『国文学』の体験主義、そして『原爆文学研究』の被爆体験の一般化へと至ることになる。したがって、原爆文学批評が表象する言語空間は、地域性という空間的距離でも時系列でもなく、体験主義という空間と、被爆体験の一般化という空間とによって重複しながら存続しているのではないだろうか。

5. まとめ

ここまで、3つの原爆文学批評誌を原爆文学批評界と捉えて、その中で継承されてきた被爆体験を集合的記憶論として理解するための資料整理をしてきた。

ここでの試みから見えてきたのは、原爆文学の世代間継承という営みそれ自体なのかもしれない。井伏の『黒い雨』を区切りとした記録／小説の二項対立は、体験主義／被爆体験の一般化の二項対

立へと展開しているように思われる。結局、この展開は被爆体験継承の風化に抗した原爆文学の世代間継承という営みだったことになる。

本稿では、この営みを集合的記憶がもつ文学の再構成作用として前提してきたわけだが、今後の研究では対象が原爆文学批評であったことも集合的記憶が再構成されるかどうかを考察する上で重要となるだろう。なぜなら、集合的記憶とは、自分が過去の出来事を経験していなくても、他者の記憶を頼りにして再構成することだからである。つまり、原爆文学批評が被爆体験の有無をめぐる対立していたと考えられるのならば、原爆文学批評という営み自体がやはり集合的記憶だということになる。原爆文学批評界の営みは、体験の記録が文学たり得るかという体験主義をめぐるの二項対立から、被爆体験の一般化へと変化するために、実体験を条件としない集合的記憶の作用そのものだと言える。

したがって、この原爆文学批評という集合的記憶は、「絶えず枠を増やし続ける記憶」⁽³⁰⁾として世代間で継承される可能性を提示してくれるのではないか。『黒い雨』を境界とした記録／小説という時間的枠に、体験主義／被爆体験の一般化という空間的枠は重なりながら、けれども、少しずつずれながら存続しているように思える。

注

- (1) Halbwachs, Maurice, [1950] 1997, *La Mémoire collective*, Nouvelle édition revue et augmentée, Albin Michel. (M. アルヴェックス著 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社 1989年。)
- (2) 本稿は、2011年に筆者が報告を行った第59回関東社会学会大会テーマセッション「戦争体験の世代間継承」における、「原爆文学『研究』という集合的記憶」を基にしている。また、本研究は、2010～2012年度科学研究費補助金若手研究B(研究課題番号22730401)「アルヴェックスの階級論から集合的記憶論への連続性に関する研究」の成果の一部である。
- (3) 長岡弘芳『原爆文学史』風媒社 1973年 3頁。以下、引用における下線による強調と[]による補足・中略は引用者による。
- (4) 石田耕治「原爆文学への決意」『安芸文学』第11号 1962年 2頁。
- (5) 1973年に『黒い雨』が東京書籍と筑摩書房の教科書に、次いで1975年に『夏の花』が三省堂の教科書に採録された(川口隆行『原爆文学という問題領域』創言社 2008年 15頁)。
- (6) 藤村作『国文学——解釈と鑑賞』至文堂1936年 創刊号。
- (7) 川口隆行「『原爆文学』という問題領域・再考」『原爆文学研究』第1号 2002年 18頁。
- (8) 石田耕治「夢の中の“原爆”——その後のこと」『安芸文学』第32号 1972年 18頁。
- (9) 黒古一夫は、『原爆文学論』(黒古一夫『原爆文学論——核時代と想像力』彩流社 1993年)での〈原爆文学の歴史〉を基に原爆文学史を作家によって次の5つの時期で捉えている。①自らの被爆体験を書いた作家(原民喜・大田洋子・永井隆・栗原貞子・正田篠枝・峠三吉など)、②被爆体験のない作家(井上光晴・井伏鱒二・佐多稲子)、③原爆を投下した側の人びとを扱った作家(堀田義衛・いいたもも・宮本研)、④被爆体験を振り返って、1960年頃から作品を発表した被爆作家(後藤みな子・亀沢深雪・古浦千穂子・竹西寛子・大庭みな子)、⑤原子力発電所事故やヒロシマ・ナガサキ以外の被爆被害者をグローバルに扱った「核文学」作家(井上光晴・小田実・大江健三郎・林京子)の5つである(黒古一夫『原爆は文学にどう描かれてきたか』八潮社 2005年)。
- (10) 楠田剛士は別の批評で、「1953年前後、ルポルタージュの流行により改めて『文学』が、『小説』が問い返されていたのである」(「1953年のルポルタージュ／文学」『原爆文学研究』第4号 2005年

- 121頁), と大田洋子『夕風の街と人と——1953年の実態』(1955年)を評する。
- (11) 亀井千明「昭和25年版『屍の街』の文脈——大田洋子が見極めた被爆5年後」『原爆文学研究』第4号 2006年 118頁。
 - (12) 大里恭三郎「『祭りの場』林京子——作品論」『国文学』第50巻8号 1985年 98頁。
 - (13) 岩崎清一郎「ヒロシマの思想と表現」『安芸文学』第33号 1972年 79頁。
 - (14) トリートは、①原爆文学作家(大田洋子, 原民喜, 正田篠枝, 栗原貞子), ②次世代を原爆の暴力が理解可能な事実として認められるようになってから登場し, 「原爆を社会的あるいは個人の内的な問題として」扱った作家(堀田善衛・いいだもも, 大江健三郎, 井伏鱒二, 佐多稲子, 前期の井上光晴), ③第三世代を「ヒロシマ・ナガサキが私たちの過去と同時に未来を, すなわち永遠に想像の中で核に脅かされ続ける人間という存在の状態と意味すると捉えた」作家(安部公房, 小田実, 後期の井上光晴)と分類する(J.W. トリート著 水島裕雅・成定薫・野坂昭雄監訳『グラウンド・ゼロを書く——日本文学と原爆』法政大学出版 2010年)。
 - (15) 原爆文学批評を牽引してきた黒古一夫は, 「『被害』の側面を強く押し出す」原爆文学について「体験(至上)主義」と呼んでおり, そこから本稿では原爆文学批評の一つの特徴として注目するに至った(黒古一夫「『原爆』から『核』へ——原爆文学が目指すもの」『長崎平和研究』第1号 1997年 68-80頁)。
 - (16) Bergson, Henri, [1896] 1999, Matière et mémoire, PUF, p. 212 (H. ベルクソン著 田島節夫訳『物質と記憶』ベルグソン全集第2巻 白水社 1965年 214頁)。
 - (17) 右遠俊郎「原民喜論——作家論」『国文学』第50巻第8号 1985年 34頁。
 - (18) 香内信子「林京子論——作家論」『国文学』第50巻第8号 1985年 49頁。
 - (19) 島田昭男「『長崎の鐘』・『この子を残して』・『原子雲の下に生きて』永井隆——記録とエッセイ」『国文学』第50巻第8号 1985年 119-20頁。
 - (20) 重岡徹「『HIROSHIMA』小田実——作品論」『国文学』第50巻第8号 1985年 108頁。
 - (21) 文沢隆一「原爆考」『安芸文学』第11号 1962年 4頁。
 - (22) 石田耕治「一つの試み——原爆文学の方法を考える」『安芸文学』第19号 1965年 18頁。
 - (23) 島陽二「歴史証言としての文学——峠三吉とその時代・序説」『安芸文学』第34号 1973年 15-7頁。
 - (24) 川口 前掲書 2002年 16頁。
 - (25) 内田友子「『不謹慎』のゆくえ——『体験』をめぐる」『原爆文学研究』第1号 2002年 82頁。
 - (26) 野坂昭雄「峠三吉の詩——目取真俊『水滴』と戦争詩を補助線として」『原爆文学研究』第4号 2005年 39頁。
 - (27) 石川巧「原爆とエロス(生の衝動)——川上宗薫の自伝的小説をめぐる」『原爆文学研究』第4号 2005年 4-5頁。
 - (28) 畑中佳恵「『原爆(文学)研究』の視角/死角——被爆の経験とどのように出会い, 出会わないか」『原爆文学研究』第6号 2007年 6頁。
 - (29) 野坂昭雄「林京子『長い時間をかけた人間の経験』論」『原爆文学研究』第7号 2008年 41頁。
 - (30) 横山寿世理「複数性と不確定性——時間に依拠する自我」『年報社会学論集』第20号 2007年 76頁。

Critiques on Atomic Bomb Literature as a Collective Memory

Suzeri YOKOYAMA

Abstract

The purpose of this paper is to arrange several “critiques” on Japanese atomic bomb literature as a collective memory, an idea suggested by Maurice Halbwachs in the field of sociology. In this paper, 75 pieces of criticism about the atomic bomb literature, from three journals, are sorted into temporal and spatial frames which Halbwachs termed “collective memory”.

This paper confirms that a collective memory has a temporal frame (atomic bomb literature is a record or literature of something that happened in time) and a spatial frame: the experiences of those personally affected by the atomic bomb are described, or are generalized in the literature. It is clear that this criticism concerning the collective memory of “Hiroshima” and “Nagasaki” connects the generation who survived the Second World War and the post-war generation.

Key words; Maurice Halbwachs, collective memory, atomic bomb literature, temporal frame, spatial frame